

## カレン語研究における私の失敗\*

加藤 昌彦

### My Failures in the Study of Karen Languages

KATO, Atsuhiko

This article reflects on several failures I have experienced during my study of Karen languages. A portion of the Karen population has been involved in a radical armed struggle against the Myanmar government, and some of these failures are closely tied to this complex political context. By sharing these experiences, I hope to offer useful insights to future researchers conducting fieldwork in Southeast Asia or other regions, helping them avoid similar challenges.

1. カレン語とカレン族について
2. 東部ポー・カレン語を研究するに至った経緯について
  - 2.1 カレン語との出会い
  - 2.2 ミャンマー留学
  - 2.3 留学からの帰国後
3. カレン語研究における失敗
  - 3.1 メーサリアンで
  - 3.2 盗難
  - 3.3 友人宅での滞在と情報局の取り調べ
  - 3.4 コンサルタント探しと宗教コミュニティー
  - 3.5 「純粋な」資料へのこだわり
  - 3.6 その他
  - 3.7 他人の「失敗」
4. 終わりに

**キーワード:** カレン語, ポー・カレン語, スゴー・カレン語, ミャンマー, 東南アジア

**Keywords:** Karen, Pwo Karen, Sgaw Karen, Myanmar, Southeast Asia

\* 本稿は、AA 研共同利用・共同研究課題「『失敗』のフィールド言語学」の2023年度第2回研究会（2024年3月5日）において「カレン語研究における私の失敗」と題して話した報告の内容に基づいている。報告の機会を与えてくださったAA研の山越康裕先生に感謝の意を表したい。

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001382>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

## 1. カレン語とカレン族について

カレン語 (Karen) はチベット・ビルマ系のカレン諸語 (Karenic languages) に属する言語で、ミャンマー<sup>1</sup>とタイに分布する。狭義のカレン語にはポー・カレン語 (Pwo Karen) とスゴー・カレン語 (Sgaw Karen) に加え、系譜的にスゴー・カレン語と非常に近いパクー語 (Paku), モーネーブワ語 (Monebwa), タレーブワ語 (Thalebwa) などがある。カレン語群の言語としてはこれ以外にも、ボエー語 (= ボエー・カレン語; Bwe, Bwe Karen), ゲーバー語 (Geba), ゲーコー語 (Geko, Gekho), カヤー語 (Kayah), カヨー語 (Kayaw), カヤン語 (Kayan), マヌ語 (Manu), モープワ語 (Mopwa), パオ語 (Pa-O), イェインボー語 (Yeinbaw), インタレー語 (Yintale) 等々の様々な言語がある。上で「狭義のカレン語」という言い方をしたのは、カレン語群に属するすべての言語がカレン語と呼ばれることもあるからである。狭義のカレン語すなわちポー・カレン語とスゴー・カレン語およびスゴー・カレンの近縁言語は、互いに非常に近い系統関係にあり、しかもこれらを話す人々は自分たちをカレン族<sup>2</sup>という一つの民族であると考えている。一方、上でボエー語 (= ボエー・カレン語) 以降に挙げた言語は狭義のカレン語からは系譜関係が一定以上離れており、その話し手たちは、ボエー語を話す人々がカレン族としての意識を持つことが少なくないのを除けば、カレン族とは別個の民族意識を持っていることが多い。特に、カヤー、カヤン、パオといった民族は自分たちのことをカレン族とは考えていないのが普通である。

チベット・ビルマ系諸言語の大部分は SOV 型言語であるが、カレン語群に属する言語はみな SVO 型の特徴を持っており、その点で特殊である (Kato 2021 参照)。

カレン族の一部は、ミャンマー独立直後の 1948 年から、70 年以上の長きに亘る武力闘争を続けている。目的は自治権の拡大あるいは独立である。ミャンマーでは、カチン族の武力闘争などと並んで、最も熾烈な反政府運動を繰り広げてきた。カレン族のすべてがミャンマー政府と敵対しているわけではないが、このような歴史的経緯のため、この民族はミャンマー最大規模の反政府勢力としてミャンマー国内のみならず世界にもよく知られている。

現在私は、東部ポー・カレン語 (ポー・カレン語東部方言とも呼ぶ) を中心に研究している。次の第 2 節では私がこの言語を研究するようになった経緯について述べたい。第 3 節ではこの論文集のテーマである「失敗」について述べる。第 4 節は結語である。

## 2. 東部ポー・カレン語を研究するに至った経緯について

カレン語研究における私の失敗を語るためには、私が東部ポー・カレン語を研究するに至った経緯について述べておく必要がある。このような機会もめったにないから、少し詳しく書く。

<sup>1</sup> 日本では 1989 年からビルマがミャンマーと呼ばれるようになった。この変更は英語呼称が Burma からビルマ語の正式名称の発音に近い Myanmar に変更されたことに合わせたものである。あまり知られていないが、ビルマ語での国名は変わっていない。変わったのは英語呼称である。本稿では国名に言及する場合、1989 年以前のことであってもミャンマーと呼ぶことにする。国名が変更されたわけではないからだ。言語名については、学術用語の一貫性を保つため「ビルマ語」と呼ぶことにする。

<sup>2</sup> 本稿では、何らかの国家の国籍を持つ人々を「〇〇人」と呼び、その国家の中に住む民族を「〇〇族」と呼ぶ。この呼び方に従えば、「ミャンマー人」あるいは「ビルマ人」がミャンマー (ビルマ) 国籍を持つ人々を指すのに対して、「ビルマ族」は国籍とは関係のない民族集団を指すことになる。



図1 本稿で言及する主な地名

## 2.1 カレン語との出会い

カレン語を研究することになった経緯のおおもとを辿れば、様々な図鑑<sup>3</sup>を読んで熱帯に憧れを抱いた小学生のころまで行き着く。さらに中学生のときに見たフランシス・ Coppola の映画<sup>4</sup>で熱帯への想いが募った。高校生のときには大野晋氏による日本語タミール語起源論が流行り、日本語の起源に興味を持った。この起源論に関連した NHK の特集番組の中で、大野晋氏が南インドのタミール人の村で語彙調査をしているのを見て、自分もこのように南国で世間に知られていない言語を調べたいと思うようになった。高校2年生のときだったと記憶している。そこで、進学の際には、高校の教師とも相談し、東京外国語大学を受けることにした。様々な専攻の中から大陸部東南アジアの勉強をする学科（当時のインドシナ語学科）と島嶼部東南アジアの勉強をする学科（当時のインドネシア・マレーシア語学科）の2つに絞り、最終的には

<sup>3</sup> 昆虫図鑑や動物図鑑も楽しかったが、世界の文化や不思議な出来事を地域ごとに分冊にして紹介した図鑑がことのほか楽しかった。その中の東南アジア編・アフリカ編・南アメリカ編が南国の異国情緒に溢れていて、いつまで見ても飽きなかった。残念ながら、正確な書名や出版社を覚えていない。

<sup>4</sup> 『地獄の黙示録』という映画である。ベトナム戦争時のベトナムを舞台にしているが、フィリピンで撮影された。そのためか、映画に映った自然環境がその後行って実際に見た南部ベトナムのそれよりも湿潤に見える。

インドシナ語学科を受験して入学した。入学した1984年当時、この学科の専攻言語は入学後にタイ語・ベトナム語・ビルマ語の3つから好きなものを選ぶ方式だった<sup>5</sup>。入学した当初はタイ語かベトナム語を選ぶつもりだったものの、少数言語の調査に興味があることを教員に伝えたところ、ミャンマーが言語の宝庫であることを知らされ、面白そうだったので最終的にはビルマ語を選んだ<sup>6</sup>。ビルマ語専攻が設置されてまだ4年目だった。

ビルマ語を勉強し始めて1年以上が経った大学2年生のころ、ミャンマーにはカレン族という少数民族がいてその言語が独特であることを知った。原田・大野(1979)の『ビルマ語辞典』に、カレン語について「文法構造はタイ語に、単語はビルマ語に近い」と書いてあったのである(p. 5)<sup>7</sup>。ほぼ同時期に加藤博氏による『地図にない国からの報告』という本を読み(加藤博1982)、カレン族が自治権の拡大や独立を求めて武力闘争を続けていることを知った。こうしたことからカレン語とカレン族に俄然興味がわいた。

大学3年生の時、東京外大でミャンマー関連の国際シンポジウムが開かれた。そこにカレン族の歴史研究者であるソー・ロック・トップ(Saw Rok Top)さんが参加していた。会場でタイ語専攻の三谷恭之教授がその人を紹介してくれて、同時にカレン語を勉強してみないかと勧められた。カレンの人と出会ったのはこれが最初だった<sup>8</sup>。三谷教授はモン・クメール諸語及びタイ・カダイ諸語の専門家であり、カレン語研究に先鞭をつけたRobert B. Jonesの弟子でもある(Jonesのカレン語研究についてはJones 1961参照)。さらに、大学4年に上がる春休みにミャンマーを一人で旅行し、汽車の中でカレンの人たちがカレン語で談笑しているのを目撃した。これが何カレン語だったのか今となっては分からないが。こんなことが続き、カレン語を本格的に勉強してみたいという気持ちが大きくなった。

大学4年になった1987年に三谷教授の卒業論文ゼミに入って卒論のテーマを探し始めた。当時ビルマ語専攻には言語学の教員がいなかった。タイ語専攻の教員であった三谷教授のゼミに所属するという一種変則的な方式を可能にしてくれた当時の東京外大の制度は有り難かった。

時を同じくして、東久留米市に日本人と結婚したヘンサダ(Hinthada)出身のスゴー・カレン人の女性ミャツ・ミャツ・セイン(Myat Myat Sein)さんがいることを知り、週に一度スゴー・カレン語の勉強をさせてもらえることになった。そこで卒論ではスゴー・カレン語を研究対象にすることにし、テーマは音韻論を取り上げた。毎週ミャツ・ミャツ・セインさんの家にお邪魔させてもらって、基礎語彙の収集と音声観察を行った。この年と前年の86年に大阪外国語大学の藪司郎教授によるビルマ言語学の集中講義が開講された。それに出席したときに藪教授か

<sup>5</sup> この方式は1985年度まで続き、1986年度からは言語ごとに分けて募集するようになった。

<sup>6</sup> 田舎から上京してきたばかりの大学一年生にとってビルマ語を選ぶことは一種の冒険だった。また、当時はアジアの発展途上国の言語や文化を学ぶことに世間一般の共感が薄く、特に東南アジアの中でも目立たないミャンマーという国の言語を専攻語として選び学習することにはある種の精神力が必要だった。しかし、ミャンマーを通して世界を見ることで私はかけがえのない多くの学びを得ることができた。

<sup>7</sup> 原田正春と大野徹によるこのビルマ語辞典は、このような百科事典的知識が豊富に記載されていて便利である。残念ながら今では絶版となってしまった。実は、「文法構造はタイ語に、単語はビルマ語に近い」という説明は物事をかなり単純化している。カレン語は基本語順がSVOである点で確かにタイ語に似ているが、細部を見れば形態統語法の違いはむしろ大きい。また、単語がビルマ語に近いという特徴は、同じチベット・ビルマ系の言語だから比較言語学的知識をもってすれば似ていることが分かるという程度のものである。しかし、このように書いておいてくれたからこそ私はカレン語に興味を持ったのであり、この注釈の意義は私にとって大きかった。

<sup>8</sup> 後で知ったことだが、ソー・ロック・トップさんはボエー・カレン族だった。しかし、スゴー・カレン語をよく理解し、カレン族としての強い誇りを持っていた。

らスゴー・カレン語についての文献を紹介してもらった（Gilmore 1898, Saya Kan Gyi 1915, Anonymous 1953 など）。また、当時書きかけだった『言語学大辞典』の「カレン語群」の項（藪 1988）の原稿を見せてくださった。どちらも 87 年の集中講義のときだったと思う。このことも自分の研究を後押しした。卒論は稚拙ながらも何とか書き上げ、当時の東京外大には博士課程がなかったこともあり、別の大学に進学してスゴー・カレン語の研究を続けた。

1991 年の 2 月から 4 月にかけて修士論文のデータ収集のためタイ北部のメーサリアン (Mae Sariang) に行った。そこでタイとミャンマー両側のスゴー・カレン語を調査した。タイ側のスゴー・カレン語を教えてくれたのはスーピット (Suphit) さんという若い女性で、ミャンマー側のスゴー・カレン語を教えてくれたのはプー・タームー (Hpu Tah Moo) さんというミャンマー側出身のおじいさんだった。プー・タームーさんから、カレン語を勉強するならカレンの武力闘争について知らなければならないと言われ、当時カレン民族同盟 (KNU) の総司令部があったマナプロー (Manerplaw) に泊まりがけで行ってみた。民族の命運をかけて闘う人々に出会い、真剣な表情に心を打たれたことを今でもよく思い出す。夜、遠くで戦闘があり、爆弾が炸裂する音が聞こえた。このころからカレン語は自分にとってなくてはならないものになった。



図2 マナプローの景色 (1991年3月)

## 2.2 ミャンマー留学

1992 年に博士課程に進み、カレン語を研究するためタイかミャンマーのいずれかに留学することを模索し始めた。カレン文化の中心地はミャンマー側にあり、数多のカレン系言語も話されている。だからミャンマーに行くのが最善であったが、ミャンマーは 1988 年の騒乱からほどなくで、軍事政権の支配下にあり、少数民族語研究には困難がつきまとうことが予想された。タイを選択肢に入れたのはこのためである。諸先輩方とも相談の結果、ミャンマーでこっそりと少数民族語研究を行うことも可能との結論に達し、ミャンマーに留学するべく当時文部省が行っていたアジア諸国派遣留学制度の試験を受けた。日本側に提出する書類には正直にカレン語を研究する旨の計画を書いたが、少数民族研究を目的としてミャンマーに入国することは不可能だったため、ミャンマー向けにはカレン語についての調査計画を一切伏せ、ビルマ語を研究する旨の英語の計画書を作成した。結果として文部省の試験には無事合格し、ミャンマー入国の許可も下りた。

ミャンマーには同 1992 年の 10 月に渡航した。国立外国語学院（現在のヤンゴン外国語大学）

の外国人向けビルマ語コースに通う。同時にスゴー・カレン語のコンサルタントを探した。カレン語を勉強したいという希望は親しい友人以外には一切伏せておいた。何がきっかけで軍事政権から目をつけられるか分からないからである。

まだコンサルタントが見つからなかった同年12月に、スゴー・カレンの知人から毎年ヤンゴンのインsein地区で開かれるカレン新年祭に行くことを勧められた。行ってみたところ、ちょうどカレンの民族舞踊ドン・ダンス (don dance) の競技会が開かれていた。そして初めて観るドン・ダンスに心を揺さぶられた<sup>9</sup>。この時の高揚感はいまだに忘れられない。新年祭の後、ドン・ダンスはポー・カレンが踊ることを知り、ポー・カレン語を新たに調査し始めることに決める。それほどドン・ダンスを見た感動と衝撃は大きかった。このころまでカレン語についての先行研究は主にスゴー・カレン語を対象としたものであったため、カレン語研究全体を進展させるという学問的な意味でもポー・カレン語の調査は望ましかった。



図3 ドン・ダンスを踊る人々 (1994年4月バアンで)

ところが、ポー・カレン語のコンサルタント探しは容易ではなかった。ヤンゴンにはインsein地区に大きなカレン族集落があるが、この住人は大部分がスゴー・カレンだった。あるとき日本人家庭の家政婦をやっていたスゴー・カレン女性からイラワジ・デルタ地域出身のポー・

<sup>9</sup> ドン・ダンスはポー・カレン語で /tōun/, ビルマ語で /dōun/ あるいは /dōunyéin/ と呼ばれる。ビルマ語の呼び名に基づいて英語では don dance と呼ばれることが多い。激しいリズムに乗って隊列を変えつつ歌いながら最大32人の男女が踊る、躍動感あふれる集団舞踊である。ドン・ダンスの詳しいことについては加藤(2001)と加藤(2011)を見られたい。私は、学部生時代に先輩に連れられて観に行ったインドネシアのバリ舞踊とガムランに感動し、また同じ先輩に紹介されて聴いたモンゴルのホーミーに魅せられた経験から、もともと世界の民族音楽や舞踊が好きだった。ドン・ダンスが好きになったのは、このような「素地」があったからだとも思う。横道に逸れるが、バリ舞踊を東京で初めて見たときの衝撃も大きかった。スカル・ジュブンという日本人のグループだったが、本格的だった。もともと私は西洋の古典音楽を聴いたり演奏したりするのが好きだったが、バリ舞踊に触れてからしばらくは、そのことをすっかり忘れてしまっていたほどだ。ドン・ダンスにはバリ舞踊のような巧さはないが、躍動感において数ある民族舞踊の中でも飛び抜けている。ところで、本格的なドン・ダンスを観るのはなかなか難しい。ミャンマー・カレン州で開かれるカレン族の祭を狙って観に行くのが一番良い。ヤンゴンのレストラン等で見せているものは、民族衣装でカレン族っぽさだけを出した言わば偽物である。総じて少数民族の文化は、大民族の文化の陰に隠れてしまいがちだ。また、動画で見ても感動はまず得られない。その場での鳴り物の振動を体感し、隊列の変化の立体感とそれに伴う歌の遠近感を味わわなければ、心が揺さぶられるような体験はできないだろう。なお、近年ドン・ダンスはカレン族全体の文化的象徴と見なされるようになってきており、この踊りの正統的継承者とも言える東部ポー・カレン以外のカレン族も踊るようになってきている。

カレンの年輩女性を紹介され、1993年4月ごろから西部ポー・カレン語（ポー・カレン語デルタ方言）の調査を始めた。後にこの女性の姪で当時30代だったナン・デア・ウィン (Nant Dahlia Win) さんを紹介され、その人が西部ポー・カレン語を教えてくれることになる。その後、留学終了の1995年3月まで調査を続行した。

一方で、ドン・ダンスを始めとするカレン民族芸能の本場はカレン州の州都パアン (Hpa-an) 周辺であることを後に知った。パアンでは西部ポー・カレン語とは意思疎通のできない東部ポー・カレン語が話されている。また言語学的にも様々な方言を調べておくことは重要なので、西部ポー・カレン語を学びながらも東部ポー・カレン語の調査ができないか模索した。東部ポー・カレン語が話されているカレン州では内戦が繰り返されている。外国人がカレン州に入るとは固く禁じられていた。しかし、当時ミャンマー全土から信仰を集めていたパオ人の仏僧ターマニャ師が住むターマニャ山に詣りたいとの旅行申請を出したところ、1994年4月に数日間だけカレン州に行くことができた。このときは知人のソー・マウン・トゥン (Saw Maung Tun) さんの家に泊まらせてもらい、東部ポー・カレン語が日常的に生き生きと使われている場面を初めて観察することができた。

カレン州からヤンゴンに戻った後、東部ポー・カレン語を本格的に学びたいという気持ちが募り、ヤンゴンで話し手を探し始めた。東部ポー・カレンの人々は距離的に近いタイ側に出稼ぎに出てしまうため、ヤンゴンでコンサルタントに適した話し手を見つけることは非常に困難であった。それでも一月以上探した結果、獣医師兼観光ガイドのソー・フラ・チツ (Saw Hla Chit) さんに会うことができた。当時40代だった彼とは良き友人としてその後30年以上に亘る付き合いが続いている。カレン州に行ったときは暑季の盛りだったが、彼に頼んで東部ポー・カレン語を学ぶようになったときは既に雨季の雨が降り始めていた。

### 2.3 留学からの帰国後

当初の予定を半年ほど延ばし、1995年4月に帰国して大学院に復学した。大学院重点化により大学院の雰囲気は留学前と様変わりしていて、博士論文を執筆することが当然になっていた。研究室の大学院生も留学前よりはるかに増えていて驚いた。留学前は文系の博士号というのは年を取ってから頂戴するものだったので、博士論文を在学中に書くようになるとは想像もしなかった（とはいえ私が博論を実際に提出したのはずっと後の2004年である）。それで自分も博士論文を書くよう先生たちに言われ、そのための研究の中心を西部ポー・カレン語にするか東部ポー・カレン語にするか悩んだ。詳細な文法書を書くのが希望である。それには調査の続行が必要だった。どちらかと言えばカレン文化の色濃く残るカレン州で話される東部ポー・カレン語を選ばたかったが、もっと詳しく調査するためにはヤンゴンではなく立ち入りの禁止されているカレン州に行かなければならない。東部ポー・カレン語の文法を深く考えるための語学力もまだまったく足りていなかった。どうしても東部ポー・カレン語が話されている地域に行く必要があった。

1995年の秋ごろだったか、カレンの内戦を調べているジャーナリストから取材を受けた。その時に教えてもらった情報から、タイ側の難民キャンプで調査ができるのではないかと思い立った。12月末に、メーソート (Mae Sot) の郊外にあったホエカロク (Huai Kalok) 難民キャンプに行ってみたところ確かな手ごたえがあり、東部ポー・カレン語の文法を書くことを決意する。それから現在に至るまで東部ポー・カレン語の勉強を続けており、これが研究の中心になっている。その後数年間、断続的に難民キャンプで調査を行った。



図4 餅つきを手伝う筆者[左] (1998年2月ホエカローク難民キャンプで)

また、1997年以降、情勢が落ち着いている時にはカレン州に入ることができるようになり、州都パアンにあるソー・ターロン (Saw Hta Lon) さんの家に泊まりこんで調査をするようになった。ただし、ソー・ターロンさんは1960年代生まれと若いのに、10年ほど前に病気で亡くなった。

なお、2021年2月にミャンマーで起きたクーデターのため内戦が再び激化し、これを書いている2025年7月の段階で、カレン州に入ることは困難になっている。今後どうなるかは予想困難である。

### 3. カレン語研究における失敗

ここからは、私がカレン語に関する研究や個々の調査において経験してきた数々の失敗の一端を紹介する。ただし、3.7で述べることだけはカレン語とは直接の関係がなく、加えて、自分自身の失敗ではない他人の「失敗」である。

#### 3.1 メーサリアンで

2.1で述べたように、私は1991年の2月から4月にかけてタイのメーサリアンでスゴー・カレン語の調査をした。メーサリアン市内に宿を取り、毎日、郊外の集落に自転車で通った。このとき、タイ側のスゴー・カレン語を教えてくれた看護師の女性スーピットさんが終始、極めて不機嫌であった。このため、今思い返してみても、コンサルタントとの付き合いという点では、これまでの調査の中でいちばん辛かった経験と言えるほどである。

調査が終わりに近づいたころ、実はスーピットさんが村人たちからかわれていたことが判明した。スーピットさんは二十代後半で独身だった。当時のタイの田舎では結婚が遅いほうに属する。このときの調査で私は、午前中にプー・タームーさんの家でミャンマー側のスゴー・カレン語を教わり、スーピットさんからは、やはり彼女の家で、看護師の仕事を終えた夕方に教わっていた。若い男が夕方に一人暮らしの独身女性の家に入出入りすれば好奇の目で見られないわけがない。

帰国後、私は彼女が欲しいと言っていた日本の切手をいろいろ見つくり郵送した。しばらくすると、タイ語で丁寧に書かれたお礼の手紙が返ってきた。

なお、スピーットさんは後に結婚し、96年に夫から伝染したエイズで亡くなった。このことを知ったのは、医療人類学の調査で集落に住んでいた日本人の看護師、大森絹子さんが後に出した著書（大森 1997）によってである。スピーットさんを紹介してくれたのは、集落でたまたま出会った大森さんだった。また、大森さん自身がこの10年後に亡くなっていたことも後で知った。

このときの教訓は、コンサルタントが好奇の目で見られないような何らかの工夫が必要だったということである。集落の男性にコンサルタントを頼むという手もあったが、大森さんがスピーットさんを紹介してくれたのは、スピーットさんが極めて聡明な女性だったからである。言語を学ぶという点では最善の選択だった。工夫としては、例えば、集落の別の人の家にスピーットさんに来てもらって調査するという手があったと思う。



図5 スピーットさん[右]と（1991年3月メーサリアンで）

メーサリアンの調査では、もうひとつ苦い思い出がある。ある日のこと、メーサリアン市内で出会った日本人バックパッカーと、この集落の近くにあった屋台で夕飯を食べ、タイで有名な蒸留酒のメコンを飲んだ。その人が集落を見たいと言ったので、市内からわざわざ集落近くまで出掛けて行ったのである。せいぜい夜の9時くらいまでだったが、次の日、深夜まで酒を飲んでいてという話が集落中に広まっていて、大森さんに叱られた。タイは敬虔な上座部仏教徒の多い国である。酒を飲むことは戒律で戒められている。この集落はキリスト教徒の多い集落だったが、飲酒を慎む文化は同じだった。このような場所で酒を飲んでしまったのは迂闊だった。

### 3.2 盗難

1998年、カレン州パアンで東部ポー・カレン語の調査を終えた後、ヤンゴンに向かう長距離夜行バスの中で盗難に遭い、調査ノート、パスポート、所持金の一部を失った。深夜の休憩時間に油断して荷物を置いたまま外に出たのが原因である。ほんの2,3分の間の出来事だった。バスの乗客も全員が長時間の取り調べを受けたので現地の人たちにも迷惑を掛けてしまった。疲

れていて重いリュックサックを背負うのが億劫だったので、座席の上に置いたまま外に出てしまったのである。戻ったらリュックサックごと盗まれていた。バスはエアコンの効いた、窓の開かない綺麗な内装のバスで、運転手や車掌もしっかりしているように見えたので、よもや外から窃盗犯が入ってくるとは思わなかったのだ。共犯者が中に乗っていて、外の仲間に手渡したのかもしれない。犯人は捕まらなかった。スーツケースに入れていたものは残ったが、自分にとっては調査ノートをなくしたことが大きな痛手だった。ヤンゴンに帰ってからも帰国のための渡航書を取る手続きに追われた。旅行中は荷物の管理に少しの油断も許されない。

### 3.3 友人宅での滞在と情報局の取り調べ

私は、カレン州パアンでの東部ポー・カレン語の調査でソー・ターロンやソー・マウン・トゥンの自宅を宿泊先として利用させてもらったために、ミャンマーの情報局の取り調べを数回受けた経験がある。尾行されていることに気づいた経験もある。幸い、取り調べは、取調室に連行されて詰問されるといった種類のものではなく、泊まり先で聴取されるだけの軽いものだったが、そうではあっても緊張感は免れない。カレン州に来た目的は何か、どういった場所を訪れたか、泊まり先との関係は何か、といったことを訊かれる。こちら側からすれば友人の家に泊まらせてもらっているだけである。しかし、ミャンマー政府の側からすれば、カレン族はミャンマー有数の規模を誇る反政府武装組織を擁するため、その組織が跋扈する地域に外国人が来たとなれば、敏感にならざるを得ないだろう。

私がカレン州で友人の家に泊まって調査をしていたのは、日常の言語を観察することが言語調査にとって良いことだと考えていたからである。彼ら自身が自宅に泊まれと強く勧めてくれたこともあって、その厚意に甘えることにした。しかしながら、調査にとっては良いことだとしても、政治的にデリケートな問題がある場合は避ける必要もある。ソー・ターロンもソー・マウン・トゥンも公務員だった。外国人を自宅に泊めたことが問題視され、最悪の場合、解雇される可能性も十分にあった。私が友人宅に泊まったことは、言語調査の観点からは良いことだったとしても、ミャンマーの国内情勢を踏まえれば、軽率な行為と非難されても致し方ないところである。



図6 ソー・フラ・チッ [左] およびソー・ターロン [中] 両氏と (2000年11月パアン郊外で)

### 3.4 コンサルタント探しと宗教コミュニティ

1994年に東部ポー・カレン語の話者を探すのに手こずった理由の一つに、キリスト教徒のコミュニティに頼ったことがある。当時、西部ポー・カレン語の調査を通して、私にはキリスト教徒のカレン族の知り合いが増えていた。ナン・デリア・ウィンさんがキリスト教徒だったからである（西部ポー・カレンの人々はおそらく3分の1ほどがキリスト教徒である。バプティストが多い。残りは主に仏教徒である）。それで、東部ポー・カレン語の話者探しをキリスト教徒の知人たちに頼っていた。実は、東部ポー・カレンの人々の多くは仏教徒である。キリスト教徒と仏教徒は互いの交流が希薄で、このこともあって、東部ポー・カレン語の理想的な話し手がなかなか見つからなかった。後に、ヤンゴンには東部ポー・カレンの僧侶を長とする僧院がいくつかあることが分かった。おそらく、こういった僧院に早い時期から出入りしていれば、話し手はもっと早く見つかっただろう。この経験から、様々なコミュニティや人々との接点を普段から持っておくことが重要だと感じている。

### 3.5 「純粋な」資料へのこだわり

私は以前、分析に用いる資料は自分で集めた音声資料か現地の人が書いた出版物に限らなければならないという思い込みを持っていた。信頼性に欠けると思ったからである。後に東部ポー・カレン語の長編ドラマの台詞を全編書き起こしたところ、今まで知らなかった様々な語彙や言い回しが出てきて自分の語学力の向上にも大いに役立った。カレン族は芸能好きで、そのためか、私が東部ポー・カレン語を学び始めた1994年には既に商業用に作成された東部ポー・カレン語のドラマのビデオがいくつか存在した。このようなものを早いうちから利用すべきだった。現在では、商業用・公共用・私用を含め、実に大量かつ多様な動画がSNSで見られるようになっており、これらを研究資料として大いに活用している。このような資料が豊富にあるという点で、カレン語の研究者は幸運である。

### 3.6 その他

思い返してみると、私の調査は失敗の連続だったように思える。ここでは、これまでに述べたもの以外の、小さな失敗のいくつかを挙げてみたい。

#### 3.6.1 録音の失敗

あるとき、小話を録音しようとした。慌てて録音機を操作し、スイッチを押し間違えたため、必要な部分が録音されておらず、逆に不必要な録音だけが残った。似たようなことは幾度となくある。

#### 3.6.2 借用語の軽視

借用語も積極的に採取すべきである。東部ポー・カレン語にはビルマ語やタイ語の借用語がよく出てくる。以前は「純粋でないもの」として書き留めないことが多かったが、最近は正確な音声表記を付し、文字情報として記録している。借用語の音声や統語特性を考える上で、またどのような意味分野の単語が借用されやすいか等を考える上で重要である。

### 3.6.3 健康

留学中、A型肝炎に罹って貴重な時間を無駄にした。1994年の10月から11月にかけて、1ヶ月以上調査ができなかった。健康には常に注意すべきである<sup>10</sup>。

### 3.6.4 謝礼

コンサルタントから謝金とは別に金品をせがまれた時、「不浄」なものを感じてしまい、以前と同じような人間関係を保てなくなることがよくあった。しかし、現在ではもっと寛容になるべきと考えている。私たち日本人の生活水準と東南アジアの発展途上国の生活水準はまったく異なるから、そのような期待を抱くのも無理はないからである。もちろん、現地の生活水準に見合わない高額な謝礼をすることも禁物である。

### 3.6.5 現地に行けないとき

カレン語は内戦が起きている国の紛争地で話されている言語である。そのため、調査地への入城ができなくなることがよくある。こういったとき、以前は何もせずに諦めるだけだった。現在はスマートフォンで録音した音声を電子メールで送ってもらおうというようなことをしている。今から考えると、スマートフォンのなかった時代でも、録音機を信頼できる友人に託すなどして自然発話を収集することはできたはずだ。ほんの小さな工夫が必要だったと思う。

## 3.7 他人の「失敗」

ここでは、自分の失敗ではないのだが、気になっていることを2つ述べておきたい。今後、野外調査をしようと考えている研究者の参考になるかもしれないと思うからである。失敗という言葉を含弧でくくったのは、もしかしたら当の本人たちにとっては失敗ではないかもしれないからだ。

1つは先にも述べた謝礼についてである。2009年にミャンマーのヤンゴンに行ったときのこと、ソー・フラ・チッさんから、旅行ガイド協会が主催する講演会に行ってみないかと誘われた。ミャンマーでは名の知られた人類学者で作家でもあるマノッタ・チョー・ウィン(Manutha Kyaw Win)氏の講演会だった。この人の名は私も以前から知っており、興味を持ったので、聴きに出かけることにした。話の内容は、少数民族の珍しい習慣を紹介するものだった。名前の先頭の「マノッタ」というのはパーリ語に由来する借用語で、「人類」という意味である。これは自身が人類学者であることを表している。

講演の中で笑い話として日本の服飾研究者の話が出てきた。その研究者は女性で、マノッタ・チョー・ウィン氏は何かの縁でシャン州での調査への同行を頼まれたそうだ。ところが、何日も一緒に過ごしているのに、謝礼もなく、食事をご馳走してくれることさえ一度もなかったのだという。そのエピソードを面白おかしく語った。聴衆はみな観光ガイドで、思い当たるふしがあったのだろう、会場は爆笑に包まれた。日本人の私は、一人いたたまれない思いで赤面するしかなかった。ミャンマー人が面と向かって侮辱と取れるような笑いを取ることは稀だが、ま

<sup>10</sup> ミャンマーの病院は入院するとかえって病気が悪くなったり別の病気に罹ったりする危険があるから入院しないほうがいいというミャンマー人の友人たちの勧めもあり、自宅療養で済ませた。その折り、ご厚意で診察してくださった日本大使館の医務官や、治療のための大量の飲料水を持ってきてくれた大使館員の方をはじめ、気を遣ってくださった多くの方々に対し、この場を借りて心より感謝申し上げたい。

さかビルマ語が分かる日本人が会場に紛れ込んでいるとは考えなかったのだと思われる。

ミャンマーの人々は謝金の受け取りを断ることがよくある。特に知識や教養に関することではそうである。しかし、内心では期待していることが少なくないことが経験から分かってきた。その服飾研究者はその遠慮を額面通りに受け取ったのだろう。これは自分にとっても耳の痛い話である。謝金は要らないと言われて、渡さなかったことが何度もあるからだ。経済格差を考えれば、こちらに何らかの期待をすることは自然とも言える。ミャンマーでは、要らないと言われても何らかの謝礼は必要なのではないか。協力への感謝として、せめて食事でもご馳走するような気遣いが欲しいものである。もちろん、これはあくまでミャンマーの場合である。国や地域によって様々な事情があるとはよく聞く。



図7 マノッタ・チョー・ウィン氏の講演会（2009年9月ヤンゴンで）

もう1つは、現地の人々と意思疎通するための語学力である。東南アジアの少数民族語を研究していると、現地の言葉が話せない研究者に出会うことがある。西洋の言語学者に多い。少数言語の習得は自分の経験から考えても非常に困難を伴うから、実用的語学力が乏しいのは理解できる。しかし、せめて現地の主要言語くらいは習得すべきではないか。本人たちの名誉のために名前は出さないが、主要言語も含めて現地の言語での会話が1分と続かない欧州の研究者を私は何人も知っている。しかもその中には意味や談話に深く関わる研究を行っている人が少なくない。あまり言いたくはないが、このような語学力で意味や談話に関わる正確で深い研究ができるとは思えない。なぜなら現地語が話せないことは、調査のときにコンサルタントの母語ではない言語（おそらく英語）でしかやり取りせざるを得ないことを意味し、それはすなわち、言語形式の細やかな意味合いを理解できない可能性につながるからである。また、コンサルタントの説明を聞き取れないことによるデータ不足にもつながりかねないからである。西洋諸国からは東南アジアに行きにくいという事情があることは分かる。しかしながら、現地語を習得しないことは、このような問題を招くおそれがあるという意味で学術的に望ましいとは言えない。加えて、言語習得の努力を欠いているとの見方から、現地文化を軽んじていると受けとめられても致し方ないと思う。

#### 4. 終わりに

言語の研究には、各言語の背景事情に応じた固有の困難が伴うものである。カレン語の研究にも固有の困難がある。ミャンマーとタイの両国で話されているため、調査用の言語としてビルマ語とタイ語の両方を勉強する必要がある。紛争地域の言語なので、そもそも現地に行けないことがよくある。また、この言語を研究していることを大っぴらにできないことさえある。私は2001年度から2016年度まで大阪外国語大学および大阪大学のビルマ語専攻の専任教員を務めた。この間、仕事の様々な場面でビルマ語研究者・教育者としての側面のみを周囲に見せる必要があった。例えば、ミャンマーからお迎えするビルマ語の客員教授に対しては、自分のカレン語研究者としての側面を隠すことが多かった。カレン族は先鋭的な反政府組織であるカレン民族同盟を擁して、ミャンマー政府関係者からは「敵対勢力」と見なされることも多いので、カレン語を研究していると言ったら反感を買いかねない。そのため十分な配慮が必要となるのである。ミャンマー人の知人の中には、私がカレン語の研究に力を注いでおり、カレン語を話すことができることをまったく知らない人も多い。それは、必要な場面以外ではそういう話題を私が避けているからである。カレン語の研究にはもともとこのような特有の困難がつきまとっていて、これに起因する失敗もある。3.3で述べた失敗は紛争地域の言語という背景に起因するものである。

本稿では、私がカレン語の研究を行う中で犯した失敗の例をいくつか取り上げた。私はカレン語を寿命が尽きる瞬間まで研究したいと思っている。調査の際の失敗はできるだけ避けたいものだが、残念ながら、そそっかしい自分が失敗から逃れるのはほぼ不可能である。だから、これからもきつと、様々な失敗を経験するのだと思う。ただ、これまでの経験を踏まえて、その失敗がなるべく少なくそして小さくなるよう気をつけたい。また、ここで取り上げた失敗が、これから言語調査をする予定の研究者諸氏にとっての参考となることを願っている。

#### 謝辞

本稿はアジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「『失敗』のフィールド言語学」(jrp000285)の成果の一部である。

#### 参考文献

- Anonymous. 1953. *First Year Karen Language Study*. Chiangmai: American Baptist Language Study Committee.
- Gilmore, David. 1898. *A Grammar of the Sgaw Karen*. Rangoon: American Baptist Mission Press, F. D. Phinney Supt.
- 原田正春・大野徹 1979 『ビルマ語辞典』大阪: 日本ビルマ文化協会.
- Jones, Robert B. 1961. *Karen Linguistic Studies*. Berkeley/Los Angeles: University of California Press.
- 加藤昌彦 2001 「カレンの民族舞踊コンテスト」『民博通信』93: 121-127.
- 加藤昌彦 2011 「第3章 カレン世界—第2節 言語・文学・歌謡」伊東利勝編『ミャンマー概説』, 269-287, 東京: めこん.
- Kato, Atsuhiko. 2021. "Typological Profile of Karenic Languages." *The Languages and Linguistics of Mainland Southeast Asia*, (Paul Sidwell and Mathias Jenny, eds.), 337-367, Berlin/Boston: Mouton de Gruyter
- 加藤博 1982 『地図にない国からの報告』東京: 晩聲社.

大森絹子 1997 『タイ山岳民族カレン：国際保健医療活動の現場から』大阪：朱鷺書房。

Saya Kan Gyi. 1915. *Introduction to the Study of Sgaw Karen*. Rangoon: American Baptist Mission Press, F. D. Phinney Supt.

藪司郎 1988 「カレン語群」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第1巻 世界言語編（上）』, 1312-1318, 東京：三省堂。